

緩叙法的否定と誇張法的否定

大久保 朝 憲

1. はじめに

本稿は、文法的否定を含む否定文が、発話としてもつ機能を、とくにその論証的な側面¹⁾に注目して記述しようとする試みである。「文法的否定」とは、日本語の文末の助動詞「ナイ」、英語の not、あるいはフランス語の ne... pas など、文全体を否定するときにもちいる無標の形態素を含む文のことで、本稿では主としてフランス語の ne... pas を含む文を対象にする。

否定の発話がもつ語用論的な特殊性については、これまでもさまざまな議論がなされてきたが、何よりもまず注意しなければならないのは、否定の発話の情報量の小ささである。坂原 (1992: 59) は、「ネコはネコだ」のような同語反復的な発話についての論考であるが、「内容的に無意味に近い文」の例として、否定文について次のように述べている。

「否定文は肯定文に比べると、情報量が少ない。このため、Je suis né à Osaka. (私は大阪で生まれた) のような肯定文は、特別なコンテクストを仮定しなくても自然な発話となるが、Je ne suis pas né à Osaka. (私は大阪で生まれなかった) のような否定文は、通常、話し手が大阪で生まれたという誤解が存在する状況でしか自然でない。実際、Je suis né à Osaka. は、話し手が生まれた場所を一つに限定するが、Je ne suis pas né à Osaka. の方からは、話し手が生まれたのが大阪でないということ以外は、何もわからない。同様に、ことに周到な準備をしないでも Oû seras-tu demain?

(あしたきみはどこにいるの)と質問できるが, *Où ne seras-tu pas demain?* (あしたきみはどこにいないの) はそうはいかない。」²⁾

このような事情から、否定文の機能はそもそも情報の提供ではなく、発話の文脈内で確立しそうなまちがった情報・信念(たとえば聞き手の先行発話)をただすことであるという指摘がこれまでもさまざまな方面でなされてきた³⁾。

このような観点に基づき、本稿では主として Ducrot (1984) にもとづいた否定の発話の分類を紹介し(2章)、その中でとりわけ興味深い「反論的否定」発話をもつ修辭的な機能のいくつかについて整理し、一見肯定文の極性を文法的に転換したにすぎない発話が、実際には「控えめ表現」「緩叙法」さらには「誇張表現」としても機能するケースを紹介する(3章)。

2. 否定発話の一般的な分類と発話の反論性

Ducrot (1984 : 216) では、Ducrot (1972) で提案された「叙述的否定 *négation descriptive*」／「反論的否定 *négation polémique*」という対立のうち、後者をさらに二つにわけて、単なる反論的否定にくわえて「メタ言語的否定 *négation métalinguistique*」という分類を導入している。

2.1. 反論的否定

Ducrot (1984) では、そこで紹介されている「多声理論 *théorie polyphonique*」の概念を用いてそれぞれのタイプの否定が規定されているが、ここではそれを解釈して一般的な用語での説明をこころみる。いま上で見たとおり、否定の発話が、文脈内で確立しそうな情報・信念をただすはたらきがあることは、すでに多くの論者が指摘している。このように、ある仮定された観点に反論するために使用される否定が「反論的否定」で、否定の発話の多くはこのタイプにあてはまり、後にみるようにメタ言語的否定は反論的否定の下位種であるし、叙述的否定もこの反論的否定から派生的に生じたものとされている。たとえば《*Pierre n'est pas intelligent*》(「ピエールは頭が悪い」) が反論的否定として

発話されるとき、これは《Pierre est intelligent》という肯定の発話（これが実際に発話されたかどうかは別として）への反論として発話されている。

2.2. メタ言語的否定

「メタ言語的否定」とは、いまのべた通り反論的否定の下位種のひとつで、反論的に発話される否定には違いないのだが、否定の対象が、否定がかかる言語表現の意味内容そのものではなく、その言語表現を使用することそのものとなっているもので、広い意味で「そのような『言い方』はおかしい」という意味で発せられる反論的否定であると言える。この「言い方」というのは、文脈上で成り立っていない前提を成り立っているものとして、それにもとづいた発話をするのがおかしい（(1)）、事態の評価を意味する表現が適切でない場合（(2)）などがある（例はいずれも Ducrot (op.cit) : 217より）。

- (1) Paul n'a pas cessé de fumer; en fait, il n'a jamais fumé de sa vie.
（「ポールはタバコをやめたのではない、いちどもすったことがないんだ。」）
- (2) Pierre n'est pas intelligent, il est génial.
（「ピエールは聡明なのではない、天才なんだ」）

(1)の否定を含む発話の前半部はポールがかつて喫煙者であったことを前提としているが、この否定はまさにその前提自体がまちがっていることを言うためのものであり、このような否定の発話が可能であるためには、実際に Paul a cessé de fumer と発話した者がいて、それに対する（反論的）反論としてセミコロ以下の説明を加えた形で発話される必要がある⁴⁾。また(2)のようなタイプの評価の述語を含む否定文では通常 Ducrot が「低下の法則 loi d'abaissement」と呼ぶ規則がなりたち、否定によってその述語の意味よりも同じ方向性で程度の低いことが含意されるのが普通で、(2)の前半部を聞くと、通常はピエールはむしろ頭が悪いと理解される。それがメタ言語的否定では、あくまでも

先行する肯定の発話の適切性が問題にされ、「低下の法則」はなりたらず、(2)に代表されるような少し意外性をともなう表現効果が生じる。

2.3. 叙述的否定

「叙述的否定」とは、逆の立場の言説に対立するものとして提示されることなく、単にある事態をあらわす否定のことで、これは反論的否定からの「発話的派生 *dérivé délocutif*」(Ducrot (op.cit) : 218) と言われ、ある意味で、形態的に反論性の標識である否定が述語と一体化して、その反論機能が背景化したものととらえることができる⁵⁾。Ducrot の例を引くと、窓を開けながら天気はどうかと聞かれて、《*Il n'y a pas un nuage au ciel*》(「雲ひとつない」)と答えるとき、これは快晴であることを言っているだけで、特にこれにたいする肯定の発話への反論の意味(「きみは曇っていると思っているだろうが」といった)がこめられているわけではない。つまり、この発話は、《*Le ciel est absolument pur*》(「空はすっかり晴れわたっている」)と言い換えが可能であるということである。ただし、言い換えが可能であるといっても、この二つが同じ発話なのではない。否定の反論機能が背景化したのは、文脈や聞き手においてそれに対する肯定の発話が成立しそうであるという状況ではないからである。そうでないところにあえて否定の発話を使用することで、いわば擬似的に肯定の発話が想定され、それに対してやはり擬似的に反論するという形で叙述的否定は成立している⁶⁾。この擬似的な反論機能によって、叙述的否定は単なる肯定による主張以上に強い主張をおこなうことができるのである。比喩的な言い方をすれば、ただ押すのではなく、いったん引いてから押すことで同じ力をより大きく見せると言えるかもしれない。

なお、叙述的否定にはもうひとつのタイプがある。これは、文脈上、それに代わる肯定の発話を特にもとめられていないような状況での否定の発話である。たとえば《*Je ne suis pas né à Osaka*》(「わたしは大阪生まれではない」)という発話が発話として成立すると考えられるのは、通常は反論的否定としてであるが、仮に、あるグループから大阪出身者だけを抽出するといった作業で、

ひとりひとりに大阪出身者であるかどうかを聞いているという文脈を想定すれば、そのときの返答としてこの発話は、叙述的否定ということになる。このような状況でたとえば《Je suis né à Tokyo》（「私は東京出身です」）と述べるのは逆に不適切であり、またここでの否定には、先にみたような擬似的反論機能ははたらいていない。

2.4. 発話の反論性

さて、上記のように否定の発話を分類し、その上で反論的否定が否定の中心的な機能をになっていることをみた。発話が「反論」となるかどうかということは談話レベルの問題で、いわゆる語用論的な要因であるが、否定の形態素というのは、少なくともフランス語については、形態素の意味のレベル（語彙のレベル）でこのような談話レベルの機能の標識となっているととらえなおすことができる⁷⁾。しかしながら、叙述的否定の存在もいえないことから、否定形態素の存在は反論的な発話にとっての完全な十分条件とは言えない。と同時に、否定発話であるということは反論的な発話の必要条件でもないことも明かである。もっとも単純には、先行する叙述的否定の発話に肯定で反論する場合、フランス語では yes/no にあたる oui/non 以外の 3 つめの返答表現 si に導かれ、通常の「叙述的」肯定発話とはちがった抑揚ではあるが、肯定発話が反論的に機能する。

(3) —Il n'est pas intelligent, ce garçon.

（「あの子はかしこくないでしょ。」）

—Oh, si, il est intelligent, tu sais.

（「そんなことないわよ。かしこいわよ。」）

あるいはまた、いかにも「自明の理」をあらわしているような次のような肯定の発話（例は CAREL (1998) による）も、その反論的機能によってはじめて発話として意味をもつということができる。

- (4) Cette église est un lieu de prière.

(「この教会は祈禱の場所です」観光地化した有名な教会内の掲示物)

つまり、ここでは、祈禱の場所たる教会内で声をあげてさわぎ、あたかもそのことをわかっていないかのような心ない観光客に対する「反論」としてこの発話がなされている。

冒頭で、否定の発話の「情報量の小ささ」に言及したが、否定の発話にしても、(3)、(4)の例にしても、このことは反論的発話に共通する性質のように考えられる。同様に反論的発話として用いられることが多い同語反復的発話などは、この点では最たるものであり、このことは、先に引いた坂原 (ibid.) でも詳述されており、(5)、(6)のような記述文タイプの「トートロジーが有意意味な解釈を受けるのは、その発話コンテクストで仮定される何らかの命題の否定としてである」(坂原 (ibid.: 74), 例とも) と明言されている⁹⁾。

- (5) Un chat est un chat, même si c'est un angora.

(「アングラだって、ネコはネコだ」)

- (6) Un chat est un chat, même si c'est un bâtard.

(「雑種だって、ネコはネコだ」)

高級なアングラを自分のこどもようにかわいがっている飼い主に(5)のように言うことは、「過大評価の訂正要求 (=il ne faut pas exagérer)」となり、雑種のネコをペットとしてちゃんと世話をしない飼い主に(6)のように言えば、「過小評価の訂正要求 (il ne faut pas sous-estimer un certain X)」になるというのが坂原の見解であるが、言い換えると、過大評価・過小評価というそれぞれ対極的な意味で、飼い主にとって「そのネコがネコでない (ce chat n'est pas un chat)」のような発話が想定され、(5)、(6)はそれに対する反論として機能しているということである。

3. 否定発話の修辭的機能

前章の議論から、本稿では、否定の発話の基本的機能は「反論」であるという Ducrot らの考え方を基本的に踏襲し、否定発話がもちうるさまざまな機能のうち、緩叙法的否定と誇張法的否定という、一見対立する修辭的機能について考察する。

3.1. 緩叙法としての叙述的否定

何かものごとのよしあしを評価するときに、フランス語でひんぱんにつかわれる (*Ce n'est pas mal*. (悪くないね) という会話表現があるが、その解釈は、文脈や発話のトーンなどによっておおむね二通り考えられる。

(7) —Ça t'a plu, ce film?

—*Ce n'était pas mal*, mais bon, c'était quand même pas un chef-d'œuvre.

(「その映画、よかった?」「悪くなかったけど、傑作ってわけでもなかったな」)

(8) —Ça t'a plu, ce film?

—Oh oui, *c'était pas mal*, même *pas mal du tout*. c'est peut-être son chef-d'œuvre.

(「その映画、よかった?」「悪くなかったね、いや全然悪くなかった、傑作になるかもな」⁹⁾)

(7)の *pas mal* は、日本語の「悪くない」の通常の使用にほぼ合致し、「良い」とまでは言えないが、そこそこ評価できるものであるという意味でもちいられている。それにたいして(8)の *pas mal* は、続けて *même pas mal du tout* (even not bad at all) と補われていることからわかるように、「良い」と言えないからこう表現しているのではなく、「とても良い」ということをあえてこのよう

に表現したものである。これは修辞学でいう緩叙法¹⁰⁾の一種と言える。このような否定発話が、前章でみたどのタイプの否定かを判断するのはむずかしいところだが、多くの文脈で、(7)のタイプの否定は、肯定の可能性をうち消したいという意味合いから反論的、(8)のタイプの否定は、反論的機能が背景化していると考えられるところから叙述的否定とひとまず考えることができる。英語の否定表現についての論考を含む田中(1998)では、二重否定についてこれと同様の指摘があり、くわしい分析がなされている。pas mal は、統語的な二重否定とは言えないが、述語 mal の評価語としての意味的否定性 (bien に対する) が pas で否定されていると考えれば田中の分析に平行させて考えることができる。田中は、二重否定のこのような特徴をつぎのように記述している。

「二重否定の基本的特徴は、控えめ表現、あるいはほかし表現である。控えめ表現は(文字通りの)控えめ表現 (understatement) と緩叙法 (litotes) に分けることができる。これは not un-X に読みが二通りあるところからきている。ひとつは、一般的に somewhat X あるいは sort of X とされる読みで、こちらは無標であり、[中略]「S読み」とする。もう一つは、extremely X で言い換えられる読みで、これは特別な文脈が必要である。こちらを「X読み」とする。」(田中1998:196)

しかし、ここで記述された特徴は本当に二重否定に独特の特徴であろうか。先の pas mal の例は、mal が意味的に否定的な述語であるから二重否定のようにふるまうとしたが、実際、否定のこのような二通りの読みは、とくに否定的な意味をもたない、また特に評価をあたえるわけではない述語にもあてはまるように思われる。

- (9) Ses cheveux *ne sont pas* longs, mais on ne peut pas dire quand même qu'il a les cheveux courts.

(「彼女の髪は長くはないけど、ショートっていうわけでもない。」)

- (10) Ses cheveux *ne sont pas longs*, c'est même très court. On dirait une espèce de garçonne.

（「彼女の髪は長くない、すごく短いよ、男の子みたいな感じ。」）

この特徴がしっくりとはあてはまらないケースは、肯定的な評価の述語が否定におかれているときで、これには、少なくともフランス語では緩叙法的な読み以外は難しい。

- (11) —Ça t'a plu, ce film?

—Ce n'était pas *bien*, disons que c'était nul.

（「その映画、よかった?」「良くなかったね、最低って言ってもいいかな。」）

- (12) —Ça t'a plu, ce film?

—??Ce n'était pas *bien*, mais ce n'était pas mal non plus.

（「その映画、よかった?」「良くなかったね、でも悪くもなかった。」）

- (13) Il n'est pas *intelligent*, il est même bête, il ne comprend rien.

（「彼は頭が良くない、バカと言ってもいい、何も理解できないんだ。」）

- (14) ?Il n'est pas *intelligent*, mais il n'est pas bête non plus.

（「彼は頭が良くない、でもバカでもない。」）

以上を整理すると次のようになる。主として形容詞述語の否定発話 X n'est pas Y は、基本的に両義的で、①単に述語 Y を否定して、Y の反意語 Z と言っているわけではないが Y とは言えないというような控えめ表現として解釈される場合と、②述語 Y の否定によって、実際には単に否定しているだけではなくその反意語 Z（Z が語彙として当該言語に実在するかどうかは別として）にあたる内容を緩叙法的に解釈しなければならない場合とがある。ただし、述語が意味的に好評価の表現である場合のみ、この両義性は多くの場合解消され、緩叙法的な②の読みが優勢となる。この最後の点について少しくわしく考えてみ

よう。

述語Yに対してその反意語Zが語彙として存在する場合、たとえば *malheureux* (不幸である) という反意語もつ述語 *heureux* (幸福である) について、*ne pas être heureux / malheureux* (幸福 / 不幸でない) という表現が何らかの価値をもつとすれば、それは、幸福でもなく、また不幸でもないような状態を意味すると考えるのが理にかなうように思われる。それにたいして、現実には形容詞述語の否定発話には上にみた二通りの解釈があり、さらには好評価の述語の場合のように、この解釈の方を欠いている場合さえある。言い換えると、このことは、なぜ *malheureux / heureux* と言えがいいところをわざわざ *ne pas être heureux / malheureux* なのかという問題である。これは、2.3.でみたように、叙事的否定が単なる肯定以上に主張を(擬似的に)強めることができるというはたらきによるのではないだろうか。背景化はしていても、否定形態素が語彙レベルからもっている反論機能は、発話の「力」としてこのようなあらわれかたをするのかもしれない。

3.2. 誇張法としての否定：「矛盾文」

発話の反論性について検討した2.4.で、否定文以外の反論的発話のタイプのひとつとして同語反復的な発話に言及したが、本節では、それと対をなす表現である「矛盾文」的な発話をもつ発話機能について、大久保(2000a, b)をもとに、「否定発話」というより大きな視点からとらえなおしたい。「矛盾文」とは、《Ce chat n'est pas un chat》のように、主語と同じ名詞を述語とする否定の述語名詞文をさして用いる¹¹⁾。これまでも繰り返し述べてきたように、矛盾文的発話と同語反復的発話は、同じ文脈で対立する発話として生起する。ある名詞句Xについて、そのXがXたる地位をゆるがすような要因があり、それにもかかわらずXはXであると主張するのが同語反復的発話、そういう要因がある以上はそんなXはXではないと主張するのが矛盾文的発話である。この対立は以下のように例示することができる。

- (15) a. Cette voiture est inconfortable, mais même comme ça, une voiture est une voiture. On peut la prendre pour y aller.
 (「この車は乗り心地が悪い、だがそれでも車は車だ。これに乗っていただければいい」)
- b. Cette voiture est inconfortable, c'est-à-dire que ce n'est pas une voiture. On ne peut pas prendre cela pour y aller.
 (「この車は乗り心地が悪い、要するにこんなのは車じゃない。こんな物に乗っていけない」)

このように、両タイプの発話は、同じ文脈から対立する発話（結論）につながる「論拠」としてつかわれることが多く、同語反復的発話は、それが形態的にはきわめて単純な肯定コピュラ文であるにもかかわらず否定に近い反論機能をもっており、矛盾文的発話は、むしろ文脈を肯定的に受けてそれにつながる結論を導いている。実際以下の実例では、矛盾文的な否定の発話が、肯定の発話でさまざまに言い換えられている。

- (16) [...] l'amour n'est valable que quand on a envie de faire un enfant ensemble. [...] Un couple qui n'a pas envie de faire un enfant n'est pas un couple, c'est une merde, c'est n'importe quoi, c'est une poussière ... les super-couples libres...
- (「[...] 愛に価値があるのは、いっしょに子どもをつくりたいって思ったときだけ。[...] 子どもをほしいと思わないカップルなんてカップルじゃないわ。そんなのはつまらない、くだらないもの、ごみだわ、なにが『自由な夫婦』よ。」)
- (映画 *La maman et la putain* (『ママと娼婦』) (Jean Eustache), séquence 30, Véronika の長いモノローグより)

しかし、だからといって矛盾文的発話における否定が叙述的否定かと言うの

も問題がある。矛盾文的発話は、(16)の例のように、「un X + 修飾語句 *n'est pas un X*」という形をとることもあるが、多くの場合次のような形式を取るほうが自然で、そうでないものもたいていは、その発話の趣旨を曲げることなくこの形式に言い換えることができる。

un X + 修飾語句 (形容詞句・節), *ce n'est pas un X* (「それはXではない」)

un X + 修飾語句 (形容詞句・節), *une chose pareille n'est pas un X*

un X + 修飾語句 (形容詞句・節), *une telle chose, ce n'est pas un X*
(「そんなものはXではない」)

すなわちここではXという表現の不適切性が主張されているのであり、これは典型的なメタ言語的否定、すなわち反論的否定の一種なのである。このように明示的なメタ言語的否定の特徴をもっていながら、文脈内では叙述的とも思えるような特徴をみせるのは、どのような事情によるのだろうか。

大久保 (2000a, b) では、矛盾文的発話について、「論証力」および「非現実化修飾子」という概念を用いた記述をこころみた。そこで明らかにされたことを簡単にまとめると次のようになる。ある発話はしばしば、つぎに続く発話を容易にするための論拠としてはたらく¹²⁾。たとえば、「この文書は国会で可決された法案だ」という発話は、当該文書についての単なる描写である場合もあるかもしれないが、多くの場合、たとえば「だから、その内容を遵守しなければならない」「だから、きみの行動はこれに規制される」などさまざまな発話の論拠としてはたらく。そこで、以下の3つの発話の連続をみくらべてみよう。

- (17) a. Cet écrit est un projet de loi qui a déjà été passé au Parlement, donc il faut l'observer.

(「この文書は国会で可決された法案だ。だからその内容を遵守しなければならない。」)

- b. Cet écrit est un projet de loi qui a déjà été passé au Parlement

après une longue délibération, donc il faut l'observer.

（「この文書は十分な討議の上国会で可決された法案だ。だからその内容を遵守しなければならない。」）

c. Cet écrit est un projet de loi qui a déjà été passé au Parlement *sans délibération suffisante*, donc on n'est pas obligé de l'observer.

（「この文書は十分討議されることなく国会で可決された法案だ。だからその内容を遵守しなくてもよい。」）

d. Cet écrit *n'est pas* un projet de loi, donc on n'est pas obligé de l'observer.

（「この文書は法案ではない。だからその内容は遵守しなくてもよい。」）

(17a, b) はいずれもある文書が国会で可決済みの法案であることを論拠にその内容の遵守という結論を導いている。両者の違いは、(17b) で *après une longue délibération*（「十分な討議の上」）という修飾語句が入っていることで、これによって (17b) は (17a) よりも同じ結論を導きやすくなっていると判断することができる。また (17c) では、「この文書は…国会で可決された法案だ」という部分は (17a, b) と同様であるが、修飾語句 *sans délibération suffisante*（「十分討議されることなく」）によって、導かれる結論の内容が意味的に逆転してしまっている。さらに (17d) ではその文書が法案であるということそのものが否定され、(17c) と同様逆転した結論が導かれている。Ducrot (1995) では、このように、ある発話がそれに続く発話を導く力を「論証力 *force argumentative*」と呼び、それは、いま見たように、修飾語句や文の極性によって強められたり、弱められたり¹³⁾、あるいは逆転したりする。そこで Ducrot (ibid.) では、(17b) の斜字体の修飾語句のように発話の論争力を強める要素を「現実化修飾子 *modificateur réalisant*」、弱めたり、(17c) 斜字体部のように逆転したりする要素を「脱現実化修飾子 *modificateur déréalisant*」と呼んでいる。したがって、(17d) の否定形態素 *ne... pas* も、これをともなわない肯定の発話が導く結論を逆転させるという意味では脱現実化修飾子ととらえられ、しかも、(17

c, d) を比較すればすぐにわかるように、脱現実化によって逆転された論証力は、もっとも強いものである。つまり、「十分に審議されていない」あるいは、「強行採決による」「独裁政治下の御用国会で」など、結論を逆転しうる脱現実化修飾子はさまざまに考えられるが、どんなに強いものをもってしても *Cet écrit est un projet de loi qui a déjà été passé au Parlement* (「この文書は国会で可決済みの法案である」) の部分は変化しない。そこでこれまでも何度かふれた同語反復的発話を続けて以下のように結論の逆転を防ぐことも可能である。

- (17) c' *Cet écrit est un projet de loi qui a déjà été passé au Parlement sans délibération suffisante, mais une loi est une loi, donc il faut l'observer.*

(「この文書は十分討議されることなく国会で可決された法案だ。しかし、法律は法律だ、だから遵守しなければならない。」)

これに対して、否定形態素によって脱現実化された発話に続く結論の逆転を同様に防ぐことはできず、(17d') は容認しがたい。

- (17) d' *Cet écrit n'est pas un projet de loi, mais une loi est une loi, donc il faut l'observer.*

(「この文書は法案ではない。しかし、法律は法律だ、だから遵守しなければならない。」)

大久保 (ibid.) にもとづく本稿の見解では、この否定形態素のいわば「復旧不可能な結論の逆転」を修辭的に機能させたのが、矛盾文的発話の発話機能である。

- (18) *Cet écrit est un projet de loi qui a été déjà passé au Parlement sans*

délibération suffisante, c'est-à-dire qu'une telle chose n'est (même) pas un projet de loi, donc on n'est pas obligé de l'observer.

（「この文書は十分討議されることなく国会で可決された法案だ、ようするにそんなものは法案ではない、だから遵守する必要はない。」）

下線部 c'est-à-dire（「要するに」）にはある種の飛躍があり、ある脱現実化修飾子によって逆転された結論に対する論証力が、否定で言い換えられることによって、結論に向けた論証力が最も強いものにまで高められている。つまりここでは否定が一種の誇張法として、みちびかれる結論への論証を容易にするように機能しているのである。

以上の考察から、矛盾文的発話における否定の機能について、以下のようにまとめることができる。矛盾文的発話が使用されるのは、大久保 (ibid.) でもみたように、脱現実化修飾子によってすでに論証力が逆転されているような文脈に限られる。矛盾文的発話が一見叙述的否定のように見えなくもないのはそのためである。反論的否定による発話は、一般に結論を逆転させるために発話される¹⁴⁾。これに対して矛盾文的発話は、あらかじめ逆転された結論を強めるだけで、逆転そのものは、文脈に既出の非現実化修飾子によってなされている。そのせいで否定の反論性がぼかされてはいいるが、実際にこの発話は、先にみたようにメタ言語的否定として「そんなものは X ではない」と主張することによって、ある X が X とよばれることそのものに前述の意味で誇張法的に異義をとらえており、その点で反論的否定とみるのが正しいと思われる。次のような対話では、矛盾文的発話の反論機能をはっきりと見て取ることができる。

(19) —J'ai acheté un frigidaire d'occasion, mais il ne conserve pas les choses bien fraîches. Désolé, mais c'est pour ça que cette bière est un peu tiède.

—En effet, elle n'est pas du tout fraîche, cette bière. Je suis désolé, mais un frigidaire qui ne garde pas les choses fraîches, ce n'est pas

un frigidaire. Tu n'as pas acheté un frigidaire, mais une grosse boîte qui sert à rien.

(「中古の冷蔵庫を買ったのだけど、あんまり冷えないんだ。それで悪いけど、そのビールもちょっとぬるいんだ」「ほんとだ、ぜんぜん冷えてないよこのビール。でもさ、冷えない冷蔵庫なんていうのは、それは冷蔵庫じゃないよ、きみが買ったのは冷蔵庫なんかじゃなくて、何の役にもたない箱さ。)」

4. まとめと展望

本稿では、いわゆる文法的否定にあたる *ne... pas* を含む発話の機能について考察した。否定の形態素 *ne... pas* は、単に文の極性を転換するだけではなく、形態素レベルの要素でありながら、「反論」という発話レベルの機能を基本にもっている。そして、その機能がさまざまな文脈で実現することで、反論機能が特殊なあらわれ方をする例として、否定が緩叙法的に発話の力を強めたり、逆に誇張法的に発話の力を強めるケースについて考察した。反論的発話が否定にかぎるものではない例として、同語反復的発話や「自明の理」的な発話についてもふれたが、ここで考察したいわば修辭的な否定発話は、ほかにさまざまなタイプの発話と関連している¹⁵⁾。また本稿であつかった反論的否定のいくつかを、ここでは一応「特殊な例」として考察はしたが、冒頭にみたように、否定の発話は、つねに何らかの特殊な機能をになって生じるものであり、このほかにどのような文脈でどのようなはたらきで否定の発話が生じるのかについては、より綿密な研究をする必要がある。また、否定という同じ形態の特徴を持つ発話が、緩叙法と誇張法という対照的なあらわれ方をする点に関して、緩叙法・誇張法という発話の修辭的機能そのものについてのより深い考察も今後の課題である。

引用文献

CAREL (1998) 《Prédication et argumentation.》 in *Actes du colloque d'Uppsala de juin*

1996,

DUCROT, Oswald (1984) *Le dire et le dit*. Paris : Les éditions de minuit.

DUCROT, Oswald. (1995) 《Les modificateurs déréalisants》 *Journal of Pragmatics*, 24, : 145-165.

DUCROT, Oswald et al. (1980) *Les mots du discours*. Paris : Les éditions de minuit.

FONTANIER (1821-1827 ; 1977) *Les figures du discours*. Paris : Flammarion.

GIVÓN, Talmy (1978) "Negation in language: Pragmatics, function, ontology." Cole (ed.) *Syntax and semantics vol.9. Pragmatics*. 69-122. New York : Academic Press.

加賀信弘 (1997) 「数値詞と部分否定」 廣瀬・加賀『指示と照応と否定』（日英語比較選書4）所収 研究社出版

河西良治 (2000) 「『*少ししか食べるわけではない』—記述否定とメタ言語的否定」『月刊言語』第29巻第11号（11月号） 大修館書店 59-64

NØLKE, Henning (1992) 《Ne... pas : négation descriptive ou polémique?—contraintes formelles sur son interprétation》, *Langue française*, 94

大久保朝憲 (2000a) 「擬似同語反復文と擬似矛盾文」『文學論集』49巻4号, 関西大学文学会

大久保朝憲 (2000b) 「『矛盾文』の発話機能」『仏語仏文学』27号, 関西大学フランス語フランス文学会

太田朗 (1980) 『否定の意味』大修館書店

坂原茂 (1992) 「トートロジーについて」『東京大学教養学部外国語科研究紀要』第40巻第2号, 57-83

田中廣明 (1998) 『語法と語用論の接点』開拓社

注

1) これについては大久保 (2000a) 参照。

2) 例文の日本語訳は大久保による。Je ne suis pas né à Osaka.がここで注釈されているように正しく用いられる状況では、これに対応する日本語としては、「わたしは大阪で生まれたのではない」という訳が自然だが、この日本語はまさに、この発話が誤解に対する反論であることを形態的に表示したものである。このことは後に述べる「メタ言語的否定」と関連する問題であるが、これについては、河西 (2000), 加賀 (1997) を参照。

3) 例えば, Givón (1978), Ducrot et al. (1980), Ducrot (1984), 太田 (1980) など。

4) さらに、日本語では(1)の日本語訳の「のではない」という部分からもわかるように、メタ言語的否定はそうとわかるための形態的な特徴が必要で、「ボールはタバコをやめていない／やめなかった」には、純粋な反論的否定の意味しかない。これについては注2の参考文献を参照のこと。

5) Nølke (1992) では述語と否定形態素が融合して「新しい述語」(48) が生じていると表現されているが、本稿では、後にのべるように否定形態素の反論標識としての機能が完全に中和したとは考えない。

- 6) 同様のことが, Ducrot (ibid.: 218) でも述べられている。また, ここに述べたような意味で, 二重否定による発話の多くも叙述的否定であると考えられる。
- 7) 日本語の「ナイ」が, このような「反論標識」であるかどうかには大いに疑問の余地がある。注2, 4でみたように, 否定の反論性をあらわすためには別の形態素が必要なことがあり, それをともしない「彼は大阪で生まれなかった」などがおかしいのは, 内容的に反論的なこの発話に, その標識がついていないからと考えることはできないだろうか。
- 8) 「情報量」という観点のはもちいていないが, 大久保 (2000a) では, 論証力の小ささという観点からこの構文が分析されている。
- 9) 「全然悪くなかった」という日本語はいかにも不自然であるが, ここでは議論の性格上, 原語の逐語訳を優先した。本文にもあるように, これはもちろん「悪いどころではなく大変よかった」の意味でもちいられている。
- 10) 「緩叙法 litote とは, あることがらを肯定的に主張するかわりに, その反対のことがらを強く否定したり, そこそそ弱く述べることで, それによってかくされた肯定的主張により多くの力と重みを与えようとするものである」(Fontanier (1821-1827; 1977: 133))
- 11) 大久保 (op.cit.) に詳述しているように, 本稿でも日常言語の発話を真理関数的にとらえる立場をとらないので, 「矛盾」の語はあくまでこのように括弧に入れて使用する。
- 12) われわれの立場はこれをさらにおしすすめたもので, これこそが言語活動の基本的なはたらきであると考えている。
- 13) 紙幅の都合で弱められる例については取り上げないが, くわしくは Ducrot (1995), 大久保 (2000a, b) を参照のこと。
- 14) たとえば次の例を参照。
 —Il pourrait passer pour un mannequin, parce qu'il est beau et grand.
 —Mais non, il n'est ni beau ni grand. (donc il ne pourrait pas passer pour un mannequin).
 (「彼はモデルにみえてもおかしくないわ。ハンサムだし背も高いから。」「何言ってるのよ, 彼は背が高くもないし, ハンサムでもないじゃない (モデルなんて無理よ)。」)
- 15) 矛盾文的発話と隠喩的発話の関連については大久保 (2000b) を参照。

(本論文は2000年度関西大学学部共同研究費を活用して執筆された。)